

第3回亀岡市新資料館構想策定委員会 議事要旨録

日時：平成27年1月30日（金） 14：00～16：15

場所：亀岡市文化資料館3階研修室

参加者：策定委員（50音順、敬称略）

浅田勝彦・伊多波良雄・大野照文・加藤美智恵・小林丈広・関口征治・田
中美賀子・田中曜次・中井伸男・永光寛・西田めぐみ・船越卓

欠席者：田中弥生・原田禎夫

事務局：亀岡市教育委員会

教育部長：木曾布恭

社会教育課文化財係長：木村均

文化資料館長：黒川孝宏

文化資料館職員：土井孝則・八木めぐみ・上甲典子・鈴木亜香音

（株）日展：小川英樹・林野雄一郎

次第：1 開会

2 文化資料館長あいさつ

3 協議項目

① 報告

（1）前回の委員会で出た意見について

（2）資料館の理念についての見直し

② 協議事項

（1）新資料館の基本機能 市民協働的分野について

4 その他

先進地視察の実施について

5 閉会

1 開会

- ・ 出席委員（12 名）欠席委員（2 名）、本委員会開催は成立。
- ・ 委員会は公開とする。

2 館長あいさつ

3 協議項目

① 報告

(1) 前回の委員会で出た意見について

事務局より報告

＜前回の資料館見学を終えて＞

- ・ 展示室 2 隣の部屋について → 整理作業実施／除湿器の対応
- ・ 蚕などの生き物の飼育展示について → 飼育スペースとしての区分けの徹底
- ・ 児童生徒製作の各種模型資料の整理 → 部門ごとの模型資料として活用
→ 開催中特別展で展示活用
- ・ 特別収蔵庫の地震対策について → コンテナ移動と地震対策の充実
- ・ 収蔵庫での資料保管状態 → 収蔵庫エリアと一般者利用エリアの区別徹底
- ・ 収蔵庫スペースの増加確保 → 今後の検討課題

(2) 新資料館の理念についての見直し

事務局からの報告

＜新資料館の理念について＞

- ・ 3 つの理念の文言整理と 10 項目の配列整理 → 整理原案（別紙）参照
- ・ 4 つの経験価値の充実 → 教育的価値以外のエンターテインメント、審美性、
非日常性を今後の各事業企画実施の中での具体化を
検討
→ 虹の美術館作品展示会（3/7～3/29）

- ・資料館の設置目的の明確化 →設置条例、人事体制を検討
- ・子どもでも見える展示方法 →子ども向け普及事業とともに展示方法の具体化を検討
 - 土器パズル等の設置
- ・館外イベントへの出前展示、PR 活動 →「環境フェスタ」等への出前展示実施。
 - 今後も積極的に対応したい
- ・わかりやすい場所に →今後、その設置環境条件等を検討
- ・亀岡全市の風土、地理、気候、自然についての展示充実
 - 特別展「アユモドキと保津川水系のサカナたち」（平成 20 年）
 - 企画展「丹波亀岡・風景のまなざし」（平成 25 年）等開催
 - 今後の展示事業で充実に努める
- ・さわる展示、体験型展示の必要性 →学校教育支援とあわせて充実に努める
 - 平成 27 年 1, 2 月、小学校などへの昔の生活道具を持って出前授業も 20 件以上
- ・屋外スペースの活用 →石棺、常夜灯などの屋外展示
 - 今後の検討課題
- ・観光面から非日常性を取り入れた体験型施設 →今後の検討課題

館長

- ・キーワードとしては、幸福度が増す、宝物といった文言を整理整頓した。
- ・10 項目並べていたキーワードはランダムすぎて分かりにくいという指摘を受け、数字はそのままにして、市民とともに成長する人づくりの観点。亀岡を再認識、再生するまちづくりの観点。次世代につなぐという意味での未来づくりの観点という項目を付けた。
- ・以下、館外のイベントへの出前展示や PR。環境フェスタ等も充実していきたい。

委員長

- ・資料館の役割は、亀岡の宝物の保全が一番大事だと考える。それがしっかりとできると亀岡の文化や魅力を発信できる。発信をしていく中で、さまざまな人た

ちが集まってくれるかどうか。

- ・参加体験型を学習にも活かす観点から考えると、ここで亀岡の宝物を保全する意味が出てくる。それを元に、子どもたちが亀岡の文化や魅力を発信する。子どもが発信すると、親御さんやおじいちゃん、おばあちゃんも喜び、世代をつないで人と人がつながる。これは大事だと思ってくれる。小さい子どもに楽しくて深い体験があって展開していく。資料館の役割をそういう観点で理解している。

委員

- ・亀岡市内の指定文化財、文化財はお寺と神社がほとんど。最近の傾向で、お寺も神社も無住が多い。そこに文化財、指定文化財がぽつんと置かれていつでも持って行ってくださいの状態。いつでも火災が起きるという状況。アライグマの被害も多い。

お寺にお金を出して建物を維持するのはこれから先は多分、厳しいと考える。そうすると、そこにある文化財がどうなるのか。建物をきちんと行政で修理をして、その中に仏像なり、神像なり、宝物なりを管理することができるか。おそらくできないと考える。現にできていないので。そうすると、どこでそういったものを最終的に預かるか。

これはやっぱり資料館、博物館の役割。要は、地域の博物館は、地域にあるものを預かって、信用の上できちっと管理していけるかということ。

これは50年、100年では済まない話で、今後ずっとそれを維持していかなければならない。文化財は地域によって特色があるので、亀岡市は亀岡市の特徴のあるものをきちっと認識をしていかなければならないと考える。

- ・もうひとつ、博物館資料が開館以来、どういう形で集まってきて、グラフ上、どう増えているか。これから先10年、どれくらい増えるか。推定でいいので、そういったものを委員会に見せてもらえたら、より資料館の構想、コアな部分として参考になるのではないか。

委員長

- ・ものの重要性を話していただいた。地域のさまざまな特色という部分が、逆に亀岡の文化や魅力を発信することにつながっていくと考える。

資料館の将来の展開像や課題などを聞かせて欲しい。

委員

- ・今失われつつある日本、亀岡の伝統や季節感が、今の子どもたちや子育て家庭にとっては重要なことだと考える。私が子どもの頃、当たり前にあった行事や、なんとなく聞いていたことが、今はもう親御さんには言葉自体の馴染みがない。ここに居ると当たり前のことが、京都や亀岡以外から引っ越して来られた方にとっては、すごく魅力的なこと。そのようなことを今、子どもたちに伝えていけないといけないと痛感している。

委員長

- ・友の会からは、資料館には学芸員が必要であるとか、非常にきちんとした、見識ある要望がある。そういう観点からはどうか。

委員

- ・本当に、学芸員のことは今回、痛切に感じている。今、大変少ないスタッフで切り盛りしていらっしゃるが、亀岡にはいろいろな宝物があって、その数に比べて、スタッフがあまりにも少ないのではないかな。
- 今、友の会は割と自主的に動いている。やはりもっと学芸員の方に関与してもらえると、質の高いレベルになっていくのではないかな。

委員長

- ・問題はこれを先に終わらせないために、会社で言えば製造部門、研究部門。資料を元にした研究があって、そこから亀岡らしい文化の発信。これが製造部門で、それを研究、それを製造するのは理念があって、研究していかないと。
- 要するに、市民の方に親しみを持ってもらう。今回、この館ではやっていないが、さまざまなハンディキャップを持った人たちに対してのユニバーサルな展

開など。

委員

- ・すごく大事なことだと考える。仏像の保管が難しくなっていくことが、要するに、地域社会が衰退していくことにリンクしている。そうすると、歴史や資料館の役割が増してくる。それに伴って、どれだけこれからそういう需要が増えてくるかは、研究が必要だと言われた。例えば、京都の右京区と、特に旧京北町が過疎化で、各家で持っている文化財や、古文書などをもう維持できない。古文書に関して言うと、持っている方も読めないの、要するに捨ててしまうという現実がある。

亀岡も同じことが起こっていると思う。幸いなことに、亀岡は一つの地域としてのまとまりが歴史的にも維持されているので、非常に取り組みやすい地域ではないかと、期待をしている。

- ・文化財（仏像や古文書など）は地域社会にたくさんある。高齢化や過疎化がゆっくりになればなるほど、需要はゆっくり増えてくる。過疎化や高齢化が急速に進めば、もう手がまわらないほど急速に需要が増える。そういう関係にある。だから実は、その地域社会が活性化すればするほど、逆にゆっくり取り組める。地域で担われていれば、行政が取り組まなくて済むが、地域でも担わなくなると、行政がますます取り組まないといけない。そこで、先ほどのスタッフがもっと必要だという関係にあると考える。資料館はその地域社会の活性化にもつながるように、ボランティアを育成するとか、古文書を読める人を育てていくなどをすれば、収蔵庫が少なくても済む。

②協議事項

(1) 新資料館の基本機能 市民協働的分野について

委員長

- ・やはり資料館とそれから地域の結びつきとのコラボという、協働ということなことが重要だと考える。次に新資料館の基本機能、市民協働的分野について。

事務局

- ・どうしてももう維持できないとのことで、古文書の寄贈を受けた。文書が焼かれるなど、文化財がどうしても維持できないという事例で館でも受け入れができることもある。

市民協働というか、展示、調査、研究、展示の意味で言うと、市民、利用者、見学者を巻き込んで、館としての役割の部分で何ができるか。

＜京筏組、保津川筏復活プロジェクト連絡協議会、の事例＞

- ・亀岡市文化資料館平成 26 年度事業計画で、教育委員会と小中学校との教育支援の連携。そして、2 番目に京筏組。3 番目も同じ筏がらみだが、京都学園大学との共同研究。亀岡と京都をつなぐ筏を、技術として、記録として再現し、京都と亀岡をつなぐ研究。

- ・川に浮かべない、陸上に作った筏 3 連が発端でこれは流さないと意味がないと。指導いただいた方はもう亡くなっている。

しかし、その技術はギリギリ遊船の船頭さんに伝えられ、実際に平成 21 年には保津峡の打ち上げから嵐山まで 6 連で下った。京都大学のスタッフと連携していたため、京都大学総合博物館のロビーで 3 連ほど実物展示してほしいと言われ、こちらから嵐山にきた材料を使って筏を展示した。

館と館としてのつながりと、地元の皆さんとのつながり。筏遊船の船頭さんとのつながり。その中で子どもたちというアプローチで、今年度はプロジェクト保津川さんと連携して筏を作ってみようという、子どもたちを対象にしたテーマのイベントの最後に、文化資料館で模型を作った。地域のそういった歴史、筏を知ることにつなげてもらいたいと考えている。

- ・城下町に最後の鍛冶屋さんがおられ、筏のカンを大量に作ってもらったきっかけで、「第 28 回特別展、道具を使う、道具を作る、職人の民俗誌 3、鍛冶屋さん」ということで、京都学園大学の学生さん協働で、道具の調査などを行い、その成果を展示会として開催していくといったような連携をしている。
- ・26 年度の京都学園大学との共同研究では、実際に保津峡から嵐山まで。これは台風などで断念した。その代わり 12 連で下ってみようということで、嵐山まで

ではなく、山本の浜まで 12 連で下るという取り組みを初めて行った。

- ・一つの筏、または地元の京筏組、南丹広域振興局、プロジェクト保津川さん、または、京都学園大学の歴民、京都大学の生存研、東南アジア研究所といったような皆さんで取り組みを行い、内容によって展示なり、活用していく形での展開を、紹介させていただいた。
- ・今後、資料館における基本的な機能として、先ほどから出ている地域の文化財、または歴史的遺産をどんなふうに守っていくかを踏まえて、市民協働的なカンパの活用の展開。またそれぞれの分野からのご意見を伺えれば。

委員長

- ・市民との協働取り組みについて、筏の場合には、無形文化財的な観点と、広報の資料やお寺に残っているような有形の文化財。
- そういう文化を、市民の方と一緒にただ守るだけでなく、守ることを通じて、地域が活性化するような観点で、さまざまなご意見をいただければ。

委員

- ・ネクタイをして行くような敷居の高い博物館と、セーターやジーパン姿で行ける博物館と 2 種類あると考える。体験を多く入れると、比較的幼稚園から小学生含め、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に来館してくれる。
- で、学校の先生といかに連携をしていくか、ティーチャーズルームを作って、そこで先生と一緒に相談しながら、いろいろと取り組んでいった。私がいた場所は、年間 150 校ほど小学校が入ってくるので、相談件数も多く、おそらく 400 ～500 人の先生が年間、相談に来られた経験を持っている。
- もう一つ、民俗文化財、民具については、じいちゃん、ばあちゃんが孫を連れてやってきて、「じいちゃんの若いときはこんなもの使ったんや」という話をしながら、展示情報を見てくれる。こちらが説明する必要は何もない。
- やはり小さい子ども、小学校をターゲットにすると人が集まってくる。
- ・もう一つのネクタイを締めた博物館は「怖い、暗い」ので小学生は寄り付かない。文化財になってくると、紫外線対策とかいろんなことで暗くしていく。

- ・ いずれにしても、体験っていうものがキーワードになっている。ただしそれは館を超えて、館の外でいろいろと活動されている。学芸員の数で充足して、初めてそれができる。学芸員が少ないのに展示と普及活動と両方っていうのはまずできない。人の数は展示なり調査なり、あるいは保管とかコアの部分がきちっとできて、初めて外へ出ていけると考える。

委員長

- ・ 今、子どもさんが一つのキーワードで出てきた。子どもさんを大切っていうのは、もちろん保護者の方、地域で、かなりの責任を学校で負われている。こういう資料館のような施設に対しての期待や要望がどのようなものか。

委員

- ・ 中学で亀岡学をずっと伝統的に何年もしていて、何年か前には亀岡祭の鉾の、完成度高いミニチュア版を作った。今どこにあるかというと、置く場所がなく、空き教室においている。今年は円山応挙の孔雀画絵を、モザイク画で1センチ角の色紙を8万枚使って作った。ギャラリーに少しだけ展示したが、今、返ってきている。確かに取り組みをするけれど、そこで作品ができた後のつなががない。それが課題と、常々考えている。
- ・ 亀岡で生まれて、亀岡で育ち、亀岡の良さを知って、亀岡へ戻ってきてほしいのが教師の願いだが、亀岡の良さを知る意味でも、こういう資料館がすごく意味があると思う。

形のあるものは残っていくが、口伝えで残されてきたものは、一回消えてしまいうともう無い。例えば男の子が太鼓や笛を習っているが、それも教える人が居なくなると消えてしまう。そういうものをどういうふうに次世代に伝えていくのか。鉾はたくさんあるが、それぞれの町で伝えられている音色も違うし、太鼓のリズムも違う。でもそれらが、その町で伝える人が居なくなれば、無くなってしまふことを考えたときに、伝えることの大切さを痛感する。

委員長

- ・学校のほうでさまざまな取り組みを行って、それがつながっていないところがあるところがある課題だ。

委員

- ・小学校3年生が、七輪で餅を焼くという体験活動があった。この昔の道具の勉強は以前、僕が4年を担任していたときに、同じように餅を焼いたことがある。で、結果、その時食べた餅がおいしかったと。やっぱり大人になって、「あのとき七輪で焼いた餅はうまかった」と言って、またその七輪で焼く良さを感じて、そのときの体験活動がずっと生きていく。そういうふうに伝わるのだと考えると、体験活動の重要性を改めて認識させられる。
- ・とにかく、親は何かいろんなことをやらせてあげたいと思っている。なかなかできない場合なら、学校として、できるだけそういう活動に触れられる教育活動は必要だと考えるし、それができる資料館は、学校としては非常にうれしいし、ありがたい。

委員長

- ・京都市には効果的な施設がたくさんあるが、博物館に一日がかりで往復、親御さんが連れて行くことを考えたらとんでもない額になる。亀岡市に文化施設がちゃんとあって、学校と連携をきちっとできる形になると素晴らしい。

委員

- ・小学校や中学校で資料館を利用するのはどんな場合か。

委員

- ・館に行くときもあれば、出前授業みたいな感じで来てもらって、案内してもらったり、講演をしてもらうという形もある。

委員

- ・時間的な制約とかバスとか。いろんな問題が生徒にあるか。

委員

- ・ 小学校の場合は、どうしても給食の絡みがあって、午前中なら 12 時ぐらいには戻る流れで、その間で終わるか、課外 3 時間に行って帰ってくるので 3 時間。午後だったら同じく 3 時ぐらい。3 時半に下校時間なので、2 時間から 2 時間半で帰ってくる仕組みを組む。もし給食を止めることになると、大体 2 週間以上前から計画をしっかりと練っておかないと、飛ぶことがあれば大変なので。だから、どうしても時間的制約がある。

委員

- ・ 亀岡も広いので地域性がある。近いところはすぐ来れるので連携ができるが、隣が大阪府のような奥まった地域から来ている子たちは、ここへ来ようとする、バスが必要になる。制約がなかなか厳しく、ここまで来させてもらうのは正直難しい。今、出前授業っていう話を聞いて、それはいいなと考えている。

※以下、以降の議論は理念に戻ったため、再度

(2) 新資料館の理念についての見直し

委員

- ・ 具体的な事例ばかりで、構想の方に入っていない気がする。感想を述べさせていただきたい。
- 理念で、人づくり、まちづくり、未来づくりがあるが、一体何のためか。“何のためにそれをやるのか”が必要で、そこを確認する必要があると考える。
- 京大の博物館と亀岡の資料館は、決定的な違いがある。(この館は)亀岡市が経営していて、京大は京大という一つの独立した組織が経営している。そこが大きな違いで、発想としてはやはり、市というところから発想すべき。
- それは何かというと、人と、町と、未来を通じて、亀岡のバリューを加えて眺めていくこと。そこに尽きると考える。
- ・ 幸福度をアップするのも、結局は“亀岡市にどれだけのバリューを感じるか”

ということ。亀岡にいろんな貴重なものがあると知って、そこに価値を見出す。それから、いろんな体験をして、亀岡の良さを知って、バリューをつけていく。いろんな経路があるだろうが、亀岡市のバリューを高めることを根底に置くべき。活動を通じて亀岡市に信頼、バリューを通じて信頼を持っていく。それが亀岡市の行政などに刺激をして、亀岡市が発展していくことにつながると考える。亀岡市のバリューにどういうふうにつなげていくかを、もう少し明示的に考える必要がある。

- ・ 人づくり、まちづくり、未来づくり。人づくりのところは交流の輪とか、ある程度、具体的なものを書いてあるが、未来づくりになると、どういう形で亀岡市のバリュー、あるいはバリューアップにつながっていくかが、見えづらい。経路としては地域の良さみたいなもの、地域と同化するなどを通じてバリューを高めていく経路が一番大きい。もう少し具体的に考えていくべきは、再認識、再生、それから亀岡の宝物を次世代につなぐっていうところを、どうやって、地域の良さを人びとが感じる形で具体化していくかを考える必要があるのではないか。

- ・ 学芸員の必要性があったが、優秀な学芸員が多いと何がいいと言ったら、ネットワークができる。そのネットワークを通じていろんな情報を持ってきて、それを亀岡市の資料館の中で生かしていくことが非常に重要。まず、亀岡市のバリューをアップするためにこういうことをやっていくことが第一点。もう一つ、重要なのは、やはりアンケート調査をもう少しやっていただきたい。

- ・ 筏流しは相当なマンパワーを使っている。ところが写真を見ると、参加者はちらほらという感じ。人数がバリューを高めるという一つの指数だとは限らないが、マンパワーに対してコストパフォーマンスを全く意識してないところも問題で、それをもう少し意識する必要があると考える。

これからいろんな資料を集める。やみくもに集めてもあまり意味がないと思うが、集めて将来どういうデマンドがあるのか、オプションデマンドを考えながら、その資料をどうやって保存していくかと考えないと。例えばこれは研究者の観点から大事だと言っても、それが将来どんな使われ方をするかなど、もう

少し発想をたくましくして、資料の収集をやっていく。いつかそれが使われるかもわからない。資料がどういう使われ方するかは、素人は知らない。知っているのは専門家なので、専門家が発想、妄想をたくましくして資料収集をして欲しい。その考え方が分かれば、一般の市民も、なぜそういうものを収集するのかの意味が分かってくると考える。

最初に戻るが、理念を策定するときは、なぜ作るのかと。亀岡市のバリューをアップするという発想のもとに、もう少し具体化すべきではないか。

委員長

- ・市民の皆さんから代表して何人か委員になってもらっている。今までの議論を聞いてどうか。

委員

- ・文化資料館は亀岡にある。で、ちょっと入ってみたら、なんとなく足が勝手にUターンする。そんなつもりで入っていないのに、入ったら足が後ろに向いてしまう。

保津川の河川改修のとき、京大の自然環境の教授の方が、単なるコンクリートの三面張りでない場所を残さないとだめだと。理由は、親と子を結ぶ点が自然にはたくさんある。自然に生えた樹木があって、クワガタなどが寄ってくる。で、子どもさんが「え？ こんな所にいるの？」とお父さんに言っている。

- ・もう一つは、資料館という遠い存在が、もっと近くにならないか。自分も少し勉強したいと思ったとき、その近くがにぎわう場所。親子で来る場所、来た人がちょっとのぞける場所に、どうしたらできるのか。やっぱり、もう少し出たぼーっとしてもらったほうが、ありがたい。体験学習に関しても、ここで身近に集まった人が感じられるような場所にして欲しい。

委員

- ・人づくり、まちづくり、未来づくり。その前段について。

先ほど、これによって何をするかという話があったが、始めに出た『亀岡の宝

で作る人づくりとかまちづくり』。その亀岡の宝ということを頭に入れてもらおうと、これは文化遺産、いろんなものによって未来づくりまで含めてやっているというのが、市民にもよく分かるのではないか。

- ・高知県の例で、新資料館の機能と事業の活動という項目で7項目ある。まず“保存する”ことが1番目。2番目に“研究する”。これは学術研究の拠点という意味を含んでいる。3番目は“公開する”。4番目に“学ぶ”。学習教育の促進の拠点にすると挙げられている。5番目に、“集まる”。先ほど、集うということが話題になったが、文化を通した交流を促進ということで挙げられている。6番目に、これも議論になっていたが、“つなぐ・結ぶ”。亀岡市内で言えば、他のミュージアムとの連携なども、つなぐ。子どものことやいろんな場合に当てはまるが、この文化資料館が“つなぐ・結ぶ”の役割をしていく。7番目に“行き交う”。これは何らかの亀岡市にプラスになるもの。地域の振興と観光振興への寄与が挙げられている。
- ・こういう項目について、亀岡の資料館について議論する上で、いろんな意見が出てきたら良くわかるし、まとめていく段に整理が付きやすいのでは。
- ・民間が作る資料館じゃなく行政が作るのも、一定限度はあるという前提のもとで、効率良く市民に使われる、そういう資料館。維持費等でだんだん人員的にも、維持管理する面でも縮小されていくようなことにならない、例えそれに近いことがあっても維持できる資料館はどのようなものか、もっと議論すべきではないか。

委員長

- ・今、キーワードで、亀岡に役に立つことの一つとして、観光があった。そのような側面から意見を。

委員

- ・7番目のキーワードにあった“行き交う”。亀岡の総目標という中で、やはり交流人口という目標もある中で、市民が誇りを持てるものでないと、なかなか難しい。観光はホームページや、最近はフェイスブックなどでPRしたり、出向い

て行って宣伝しても、まずその効果は薄くて、それよりも食べるものであれ、ミュージアムであれ、「こういうのがあるから一回見に来て」という、誘いが一番効果的だし、亀岡の文化・風土を知るといより、体感・体験ができるものであるべきと考える。そういう施設を目指してほしい。

最近はホームトリップという形でグループ旅行というのが中心になっているし、誰かがちょっとブログを入れれば、人がどっと寄ってくるというような、人の流れもだいぶ変わってきた。やはり行って「良かったわ」と帰ってもらうのが、資料館であれ、飲食店であれ、人がリピーターになってもらえることにつながると考える。その点では、観光という目線はその次かもしれないが、この施設が地域の大きな資源になり、より充実するためには、それを担う方々が、そういう人材を配置してもらうことも、大事ではないか。

委員長

- ・学校自体が近くにあるということの観点について、何か意見はないか。

委員

- ・学校に対するアプローチは、もう少し必要。真面目な先生は電話するが、電車賃が高くつくからやめときましようと、そういうレベルの話で終わってしまう場合が多い。
- ・この頃は出前授業がNPOや企業など、いろんなところから誘いがあり、ボールペンやファイルなどいっぱいおみやげを持ってきてくれるので、それに対抗しようとする、なかなか難しい。だからと言って、筏に乗る人間が少ないのは、もっと工夫が必要。せっかくこれだけのものがありながら、たぬきの糸車など、あれだけで6年間に1回しかここを利用しない小学生が居るのは非常にもったいない。その辺はやり方次第だと考える。

新資料館がどんなものになるかはあまり関係なく、どんなものになってもあるものをどう使うかを皆で考えたらいいいことで、まずどんなものを作るのかは、あまり関係ないのではないか。あるものがあれば学校の先生が何とかされるし、授業を作れと言われれば、養蚕、生糸の授業など、いくらでも作れると考える。

小学生、中学生ではなく、一体どんなものがこの地域にあって、それがどういう形で集められるのか。もっと言えば亀岡はどんな所で、亀岡は何がいいのか。亀岡は戦国時代やその前から非常に豊かな町だった。その豊かさは、この資料館のどこを見れば分かるの？ で、なんで 10 万人以上人口が増えないのか。それはこの資料館を見ても分からないかもしれないが、そういうものも含めた資料館であってほしいと考える。

委員長

- ・ 豊かなら豊かさを示せということか。で、皆さんが、この構想を作る中で資料を出してもらえばそれが次世代にも地域にもつながり、未来にもつながる。未来につながるということは外にも波及効果があって、観光などを元に何のためにやるかというところを、もう一度考えていくことにつながっていくのだろう。

委員

- ・ 例えば首塚があるとか、梅岩が居たとか、あったあったばかりで。それがじゃあどうしたというところを、見る、あるいは体験することによって何が得られるか、イメージーションをたくましくして、ストーリーを考えないといけない。亀岡市はいろんなものがとにかくある。でも、あるだけで、じゃあどうだと。例えば絶滅危惧種と言われるアユモドキ。ではアユモドキを残して、一体どうなるんだということを言われたとき、貴重だからという理由もあるだろうが、例えば、そういうことがあるかどうか分からないけども、残っていると将来、細菌が現れたときに細菌退治できる、だからそういうものを守っておかないといけないんだとか。これがさっき言ったオプションデマンド。要するに、将来あるかもしれないデマンドをそこで思い起こさせる。
- 首塚があって、それを知って、いろんなところを知ったら、それが将来や現在において、どういうふう考えたらいいかにつながるところが非常に重要。
- その体験を考えないで、とにかく体験したら面白いじゃないかと、逃げているのではないか。じゃあ体験して一体何が起こるかということを、教育的立場やエンターテインメントなどいろんなものに。それがどうなんだっていう先を皆

で考えると同時に、学芸員さんたちは専門なので、そのところを出してもらわないと、具体的な構想が出てこない。

委員

- ・例えば、筏作りなら水を通して筏っていうものを見ようとか。亀岡は水の豊かな町で、酒造りもあればいろんなものがある。だから筏にも乗れるし、アユモドキもいるんだよ。だから山を守りましょう、あんな所にごみ処理場は作らないように言いましょう…というふうだと、とてもまとまりのある話になると考える。何か目的としての亀岡づくりを、まちづくりと関連付けるのか、具体的なものをもう少し出してもらったほうがいい。それをつなぐ何かは皆で考えられると考える。もうちょっと文化資料館なのか、自然文化資料館なのか、民族文化資料館なのかがわからない状況で、ちょっと困っている。

委員

- ・やはり本物。本物をとにかく見せることが必要。
例えばそばづくり体験で旅行は、最近、あまり人気が無い。なぜかというところ、どこでもできるようになってきた。そうすると今度は、そば名人が作るようなそばづくりの得意なところにはいっぱい人が行くようになる。つまり、本物志向。筏の場合、何が本物かというところが分からなかったのではないかな。
さっき言われた、「筏の仕組みの中で筏を考える」のはひとつの大きな方向だと考える。
本物をとにかく見せるということで、ただ作るだけ、ただ流すだけなのか、なかなか踏み込めないところがあった。やっぱり本物を見つけて見せることも必要なのではないか。本物は何かということ。

委員

- ・この資料館は“～ミュージアム”とか名前になるのか。名前もおしゃれにしたいと考える。亀岡のシンボルになる資料館になってほしい。
この資料館が新しくなるに向け、それがシンボルで亀岡のイメージアップにつ

ながら何かの特徴を出したい。

亀岡って言うと、「いいやん、そんな所住んで」と、そういうふうに思ってもらえるような、明るい展望でできたらいい。

委員長

- ・ はい。展望は徹底的に明るく。もうひとつは現実の資料館はこれであると。未来へ向かってどういうベクトルを引くかが、この委員会の責任で大変だが、一番大事なことは、今、これだけの知恵をお持ちの方に、いろんな意見をいただいている。まずは全部吐き出して、面白いアイデアや現状に対する厳しい指摘も含めて全部出してもらって。実績とアイデア、積み重ねが必要なので、これから皆で金がなくとも心が熱くなるような議論を重ねていきたい。きょうの議題二つについては終了とする。

4 その他

先進地視察の実施について

2月17日（火）午前8時、文化資料館出発

みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアム（岐阜県美濃加茂市）

南山大学人類学博物館（名古屋市）

事務局

- ・ みのかも文化の森は館長にご対応いただく。博学連携が充実しているので、そこで体制やシステム等についてお話を聞く。同時に地元の小学校の様子も実際に見学ができる。声のドラマの会は、ボランティアさんが朗読で指導し、そこに学習係が支援の形で加わる。先生方、大人の関わり方を拝見できると考える。あと、館内施設であるとか、収蔵庫の見学もお願いした。
- ・ 南山大学人類学博物館では学芸員さんから展示見学の案内と、収蔵庫の見学の案内。リニューアル直後ということで、それについてお話を伺う。

ここでの一番の特色は、“全ての人の好奇心のために”を合言葉に、展示室や展示資料は、ほぼ全て触れる展示をしておられる。そこを中心に見学やお話を伺う。

4 回目委員会の実施について

事務局

- ・ 次回は 2 月 24 日火曜日、10 時から 12 時に第 4 回目を開催したい。

5 閉会